

新安郡のキリスト教と島民生活

金 美 連

Miyeon KIM. Christianity and the Islanders' Lives in Shinan County. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.31 – 38.

Shinan County(Sinan-gun), located at the south-west of the Korean Peninsula, showed the highest proportion of Christians in a survey of the National Statistical Office in 2005. Christianity was spread throughout the region by martyrs who have influenced believers until now. Many Christians have especially visited Jeung island(Jeung-do) which has a martyr memorial.

Christianity has changed ancestor worship, funeral rites and festivals in Shinan County. The churches have also been influenced by traditional culture. For example, there are many Christian rites that follow traditional manners, and churches have opened schools for the increasing elderly population, to cope with an aging society.

This paper historically considers the Christian evangelical process in Shinan county. Also the changes and impacts that Christianity has brought to the islanders' lives are considered.

はじめに

新安郡は朝鮮半島の南西の海上にある73の有人島と754の無人島で構成されている。この中で智島(1975年)は海峡が埋められ、押海島(2008年)は橋で内陸部とつながっているが、それ以外はすべて島嶼であり新安郡は全国で一番島嶼の多い行政地域である。地理的には中央政府から孤立しやすく、産業化や近代化にも遅れをとっている地域である。

しかし、このような新安郡が2005年の統計庁の調査で全国でもっともプロテスタントの比率が高い地域ということが判明した。1995年の統計庁の調査ではプロテスタントの比率は人口の29.48%であったが、10年間5.52%増加して2005年の調査では34.98%を示した。全国のプロテスタントの比率が1995年の19.64%から2005年の18.23%に減少した現状とは逆である。

とりわけ新安郡の曾島は実際に住んでいる住民の90%近くがプロテスタント信者であり、全国でもっともキリスト教信者の比率が高い地域である。曾島には寺はなく、村の堂(村祭りをを行う所)も1カ所残っているだけで、教会が共同体活動の中

心となっている。他の島は曾島ほどではないが、それでも多くの村に教会が建てられている。

本稿では、辺鄙な新安郡にキリスト教(プロテスタントを中心に)が伝来して、全国一のキリスト教化に至った過程を探りたいと考える。そしてキリスト教が島民生活にもたらした変化や影響、さらにキリスト教の土着化過程についても考察したい。

I. 新安郡のキリスト教概要

新安郡は行政的に全羅南道に属しているので、全羅南道のキリスト教の伝来に触れながら新安郡のキリスト教の伝来と普及について述べることにする。

韓国におけるプロテスタントの伝来は1884年にアメリカ宣教師の来韓から始まったが、1892年6月には北監理教(日本におけるメソジスト教団)と北長老教の宣教師たちによって宣教地域を分割することが協議された。そしてその翌年には全羅道は忠清道とともに南長老教が担当することが決まった¹⁾。1894年には南長老教に所属していたテイト(L. B. Tate)宣教師と彼の妹のメティ・テイ

ト (Mattie S. Tate) 宣教師が全羅北道全州に派遣され、宣教活動が始まった。1897年3月には全羅南道羅州にも宣教拠点の築こうとしたが、儒教学者たちの活動が活発な羅州ではキリスト教への反発が大きかったため、同年9月に羅州での宣教事業を撤回し、木浦に活動の場を移した。全羅南道の港町である木浦は1897年10月に開港したばかりで外国人が居住しやすく、宣教の自由が保障されていたからである²⁾。それから光州や順天にも宣教拠点を築き、全羅南道は広い範囲にわたってキリスト教が伝えられるようになった。宣教師たちは教育や医療活動と並行しながら献身的に布教に励み、信者数はますます増加していった。初期は年寄りや夫人、農民、漁民など、主に下層の人々の入信が多かったが、1919年の3・1運動³⁾以降は青年や知識人も入信した⁴⁾。

木浦におけるキリスト教の普及は木浦から近い新安郡にも影響を与えた。木浦で働いていた宣教師たちの中には近隣の島にも足を運んでキリスト教を伝えた者がいたが、中でもメッカルリ (Mr. Mrs. H. D. McCallie) 宣教師夫妻は島嶼地域の布教に献身的であった。下に引用している1910年の木浦宣教部のレポート⁵⁾には、彼らの活動振りが記されている。メッカルリ宣教師はアメリカから送られてきたボートに乗って、100以上の島々を訪問しながら布教した。彼が島嶼地域を最初訪問した1908年には教会が1カ所しかなかったが、1910年には6カ所の教会が新たに誕生した。その中には新安郡の最初の教会である飛禽島の徳山教会も含まれている⁶⁾。

H. D. McCallie says “This work is nearly all quite new, there being only one church with baptized members when turned over to me in the Fall of 1908. The Islands embrace four whole counties and number over 230. …… Faithful pioneer work, chiefly through native assistants, was done by Dr. Owen and Mr. Preston, and thus is illustrated the saying that one sows but another reaps. After the gift of a sail boat from my father I have gone North, East, South and West visiting over one hundred Islands and

hundreds of villages so that thousands have heard the Good News for the first time. Almost without exception our welcome was cordial while our message received an attentive hearing. Every part of my territory was revisited this spring and six new churches started. ……”

1920年代に入ると、韓国人による布教も活発になっていく。特に朴道三長老⁷⁾は小船に乗って南西海岸の島々を回りながら布教し、新安の教会成長に大きく貢献した。そして文俊卿 (문준경) 伝道師 (写真1) が、朝鮮戦争 (1950～53) の最中に新安の曾島で共産党に殺害され殉教した事件を契機に、聖潔教 (日本におけるホーリネス教団) の教会が大きく発展していくことになった⁸⁾。



写真1 文俊卿伝道師 (八禽島元山教会所蔵)

文俊卿伝道師は、1892年に新安郡岩泰島で生まれた。17歳の時に新安郡曾島に嫁に行ったが、夫には既に愛人がおり、結婚初日からやめのような生活をしなければならなかった。男尊女卑の社会の下でやりたい勉強はできず、夫には捨てられ苦しくて寂しい日々を送らざるを得なかった。その後、彼女は木浦に出ていったが、そこでキリスト教に導かれた。彼女は新しい人生を得た喜びのあまり、キリスト教に献身することとなった。神学校での勉学の途中、彼女はまず夫が愛人と暮らしていた新安郡荏子島に真理教会を建てた。さらに、結婚して20年あまり住んでいた曾島にも甌島里教会を建てた。そればかりでなく、小船に乗って新安郡の多くの島々に出向き、キリスト教の布教に励んだ。

しかし日本の植民地支配の末期には、曾島の教会は親日派に売られ、文俊卿伝道師も日本の警察に尋問を受けることがあった⁹⁾。だが悲劇はそれに留まらず、彼女は朝鮮戦争の最中に共産党に逮捕され、「卵をたくさん産んだ雌鳥」と嘲られながら殺されたのである。彼女は死を避けることができない状況だったにも拘らず、信者たちを心配して自ら曾島に入って行って、結局殉教（写真2、3）したのである。文俊卿伝道師が殉教した日には荏子島の真理教会でも48人の信者たちが共産党に殺された。彼らの命も惜しまない殉教信仰は多くの人々に感動を与え、新安郡でキリスト教を広める原動力となった。



写真2 文俊卿伝道師の葬列
(八禽島元山教会所蔵)



写真3 文俊卿伝道師の殉教記念碑

戦後は様々な教派のキリスト教会が新安郡でも活動するようになった。しかしキリスト教の伝来初期に全羅道を割り当てられた教派は南長老教で

あったため、現在でも新安の南部地域では長老教の教会が多い。一方、新安の北部地域では文俊卿伝道師の熱心な布教と殉教の影響を受け、聖潔教が優勢である。中部地域では諸教派が混在している。ただし、これらの諸教派は競争関係にあるだけではなく、島という限定された空間の中にいるという連帯感もあり、教派を越えた集会も催される。

新安郡における長老教と聖潔教は、まず島の中心の村にそれぞれの教派の拠点となる教会を建てた。そしてその教会が成長すると、他の村々にも同じ教派の教会を設立していった。その結果、現在は新安郡のほとんどの島に、しかも多くの村に教会が建てられており、全国一のキリスト教化を誇る地域となったのである。次の表1は新安郡の宗教団体の現況を示しているが、新安郡ではプロテスタント教会が圧倒的に多い。

表1 新安郡の宗教団体の現況
(2013年3月現在)

	人口 (人)	プロ テス タン ト 教 会	カ ト リ ッ ク 教 会	仏 教 寺 院	儒 教 の 郷 校 *
智島邑	5,012	27	1	1	1
曾島面	2,025	11			
荏子面	3,647	13	1		
慈恩面	2,405	9	1	1	
飛禽面	3,891	15	1	1	
都草面	3,097	14	1	2	
黒山面	4,578	20	1	2	
荷衣面	2,020	11	2		
新衣面	1,856	7	1		
長山面	1,772	7	1		
安佐面	3,483	18	1		
八禽面	1,190	5		1	
岩泰面	2,224	11	2	1	
押海面	6,753	24	2	1	
合計	43,280	192	19	12	1

典拠：新安郡庁の資料をもとに作成。

*郷校(향교)は儒教を教えるための国家教育機関である。現在、全羅南道には29カ所の郷校が残っているが、新安郡には1カ所がある。智島の郷校は1898年に設立され、現在は春と秋に孔子や儒教の先賢たちのために祭祀を行っている。

新安郡は交通が不便で近代化にも遅れをとっている地域であるが、プロテスタント教会は192カ所にも上る。カトリック教会は大きな島に1カ所ぐらいあるだけである。ただ、例外的に黒山島のカトリック教会の教会員の人数（2013年3月現在）は352人であり、20カ所のプロテスタント教会の教会員の人数を合わせた641人の約半分に当たる。黒山島におけるカトリック教会は1952年に建てられ、1915年に建てられたプロテスタント教会より始まりは遅かったが、教育や福祉に力を入れながら活動したため、新安郡の中ではもっともカトリック教会の活動が活発である¹⁰⁾。仏教寺院は12カ所あるが、すべてが20世紀に建てられており、寺院の規模も小さい。そして寺院に所属している信者たちの信仰心も本土に比べると深いとはいえない。その他、「タンゴル（당골）」¹¹⁾と呼ばれる巫女は現在飛禽島に1人、長山島に3人いるだけで、近代化やキリスト教の普及などにより巫俗も衰退化を辿っている。

新安郡におけるキリスト教の普及の要因として考えられるのは、前述した通りに宣教師たちや信者たちの献身的な働きと殉教、そして長老教と聖潔教を中心として繰り返された教会開拓である。また新安郡は15世紀から16世紀にかけて日本の侵略により島を空けておく「空島化政策」が進められ、今日の島民の先祖といえる人たちは17～18世紀に本土や近隣の島嶼地域から移住してくるなど、大きな社会変動を経験しており、そのため本土に比べると儒教や仏教の基盤が強くなく、外来宗教がより受け入れやすかった側面がある。特に男尊女卑の儒教倫理の下で抑圧されていた女性たちは、教会活動を通して新たな自分を見出すことができた。現在も女性信者の方が男性信者の2倍を超えており、島特有のたくましさを備えている女性たちは積極的に教会を支えている。教会側も島民の宗教的欲求や必要に応じながら島嶼文化に根付くことができたと思われるが、これについてはIIIで具体的に述べることにする。

II. キリスト教による在来文化の変容

1. 信者個人への影響

ここでは、キリスト教が島民生活にもたらした影響や変化について論じることとする。まずキリスト教の信者個人への影響を探りたい。

韓国では古来から家の守護神が財運と食運を象徴する穀物に宿ると信じ、それらを甕や壺に納めて拝んできた。新安郡でも初稲粃を納めてマレ（마래；板の間）の隅に安置するソンジュドンウ（성주동우；成主甕）や、新米を納め白い紙で蓋をして部屋の棚の上におくアネオガリ（아내오가리）、子供を授け安産と成育を見守るとされるチアン婆さんが宿るとされるチアンオガリ（지앙오가리）などを家の守護神と見なし、大事に祀ってきた。しかし近年新安郡では家の守護神信仰の神体として用いられた甕が多く姿を消してしまった。1980年代以降行われてきた住宅改良の際に甕を処分した場合が大半であるが、中にはキリスト教信者となり、偶像崇拜的要素を排除しようとする信仰的決断から甕を処分したケースもある。

また初期の宣教師たちは偶像や迷信を打破することを唱えていたが、その精神は現在でも受け継がれており、偶像崇拜に当たるベッコサ（벉고사；船告祀）や、クッ（꺄；巫俗祭儀）、占いなどははいけないこととされている。

ただし、伝統儀礼のうち、現在なお重要視されている死者儀礼に関しては折衷的な儀礼を設けて対応している。死者の生者への影響を信じている新安郡の島民にとって死者儀礼は粗末にはいけないものである。そのため、キリスト教信者になった場合でもキリスト教式に形式を変えて儀礼を行っている。祖先祭祀に代わるキリスト教式儀礼を「追悼式」と呼んでおり、葬式に代わる儀礼は「キリスト教式葬式」という。キリスト教式儀礼は伝統的儀礼の方式を踏襲しているが、それでも供物を供えて行う死者への祭祀をしないため非信者にとっては在来の死者儀礼への否定として受け入れられている。そのため、キリスト教式儀礼への移行をめぐる信者と非信者の間で葛藤や衝突が頻繁に生じている。

墓地については、押海島の中央聖潔教会、押海

大川教会、大川中央教会で教会墓地を所有しているが、それを利用する信者は多いとは言えない。中央聖潔教会の場合は、2015年9月現在50数体が埋葬されており、押海大川教会は40数体が埋葬されている。新安郡では畑や山の一面に一族を個別の墓に土葬するか、あるいは風水的な理由や便宜を図るために先祖が葬られている場所とは別の所に個々人の墓を造成するかにする。ところが、キリスト教信者になっても墓地は家族で保持・継承するものであるという認識にあまり変わりはない。ただ、信者の印として墓石に十字架を彫り入れることはある。

価値観や観念の変化としては神観念の変化が大きい。新安郡は本土に比べて儒教や仏教の影響が強くなく、韓国本来のものと推察される靈魂観が窺われる地域である。現在でもソンチュ（성주；成主）¹²⁾信仰や鬼神（귀신）¹³⁾・トッケビ（도깨비）¹⁴⁾信仰、龍王神（용왕신）¹⁵⁾信仰などが衰退しながらも存続している。しかし、キリスト教ではこれらの神々は単なる偶像に過ぎず、キリスト教の神だけが唯一神である。新安郡は死の前にしても信仰を屈しなかった殉教によってキリスト教が広がった地域であり、現在でも本土より迷信や偶像に対する排他的姿勢が強い。ただし、長年伝統文化の中で生活してきた年寄りの信者たちは伝統的な神観念や靈魂観を引きずっており、それらがキリスト教的な神観念と重層的に重なり合っている。

その他、酒やタバコをやめ、誠実になったという評判もある。また年老いた女性信者たちはほとんどが無学で韓国語が読めなかったが、10年以上教会に通った信者たちの中には韓国語の聖書を手に取りながら韓国語を読んだり、書いたりすることができるようになった場合もかなりある。

2. 村への影響

ここでは、キリスト教が村へ及ぼした影響について探してみたい。

新安郡では島民の安寧と豊作を祈願して行う村祭りを「堂祭（당제）」という。1983年の報告によると、新安郡では120カ所で堂祭が行われていたというのが¹⁶⁾、現在は堂祭を行っているところは

数少なくなった。若者の都市への転出や近代化などが大きな要因であると思われるが、キリスト教の普及も堂祭の衰退を促した一因であると考えられる。なぜなら堂祭は儒教式あるいは巫俗式で行われるため、キリスト教信者たちは参加を忌避するからである。これをめぐっては信者と非信者の間で葛藤が起こっている。信者が多い村では教会が村共同体の中心となるため堂祭への対応は難しくないが、そうでないところでは対立関係になってしまう。

自然の力に多く頼らなければいけない島嶼地域であるため、豊魚祭や祈雨祭なども多く執り行われていたが、現在は堂祭と同じく、キリスト教の普及などにより衰退の道を辿っている。豊魚祭は個人的に儀礼を行うこともあるが、堂祭と同じく村共同体で執り行う場合が多い。村で執り行う際は儀礼の方式をめぐって、信者と非信者の間で摩擦が生じることがある。荏子島下牛里では1997年から豊魚祭を再び始めたが、教会では豊魚祭をキリスト教に反する儀礼と見なし、キリスト教の礼拝を取り入れた豊魚礼拝として行うことを要求した。しかし非信者たちはこの提案に強く反対したため、教会側と非信者がそれぞれ違う形式で別々に儀礼を行うことになった¹⁷⁾。キリスト教が村の生活にも影響を及ぼそうとするとこのような葛藤が付きまとう。しかし今日はキリスト教の影響だけでなく、高齢化や科学の発達などにより、村祭りの衰退は加速されている。そのため、新安郡庁では海水浴などで年々増加している観光客を誘致するための手段として、これらの祭りを奨励しようとしている。ただし、宗教的色彩の少ない郷土祝祭として推進している。

一方、押海島宋孔里の事例のようにキリスト教への反動として巫俗儀礼が復活した場合もある¹⁸⁾。宋孔里では村で交通事故のような悪いことが多発したため、木浦にある巫堂（무당；巫女）に伺いを立てた。すると事故の原因が教会の建物と教会の前にある墓が村の運気を断ってしまったからだといわれた。それで村ではお金を集めて巫俗儀礼であるクッを行ったことがある。このように非信者たちがキリスト教に対するリアクションを起こして、伝統儀礼を復活させたこともある。

一方、キリスト教は村の非信者たちの儀礼にも影響を及ぼす。新安郡では旧正月や秋夕（陰暦8月15日）の前夜に本土に比べると素朴ではあるが、祖先を祀る「茶礼（차례）」を行っている。キリスト教信者の場合は家族でキリスト教式礼拝を行ったり、本土に出ている家族が戻らなかった場合は何もしなかったり、教会でプログラムがある場合は教会に出席したりする。ところが、村人の関係が親密である新安郡では、このような信者らの対応は非信者たちにも影響を及ぼし、非信者の茶礼も段々簡素化してきている。またキリスト教式葬式の場合も虚礼でないという点については非信者からもいい評判を得ており、葬式の簡素化に影響を与えている。

それから妖怪的存在、あるいは人に取り付くと災いや病気をもたらす疫神的存在として観念されている「トッケビ（도깨비；鬼）」や、青色の花火のような「トッケビ火（도깨비불；鬼火）」も以前は夜よく村に現れたが、教会が建てられてから現れなくなったという話もある。

Ⅲ. キリスト教の土着化

キリスト教が信者個人や村にもたらした影響や変化は先述した通りに様々なことが挙げられるが、ここからは今までの論述とは反対に在来文化の影響で被ったキリスト教側の変化や対応について探りたいと考える。

森岡清美は、文化変容と土着化を区別して、前者が外来文化との接触によって在来文化がどのように変化したかに焦点を置いているのに対し、後者は外来文化の変化の方に観察の焦点が置かれ、外来文化の型が在来文化の型によって変容し、かくて在来文化の中に受容され定着することと規定している¹⁹⁾。そして外来宗教の受容・定着の問題を個人的レベル、集団的レベル、制度的レベルという三段階に分け、土着化は外来宗教が制度的レベルの定着に達した段階で用いることを提案した²⁰⁾。

この森岡の定義によると、今まで論じてきたキリスト教の信者個人や村への影響は文化変容に当たり、これから探るキリスト教側の変容や定着過

程は土着化に当たるといえよう。

新安郡におけるキリスト教の土着化の現象として見られるのは次のようなことである。

第一に、島民の宗教的欲求に応じて儀礼を催していることである。新安郡では従来から年中行事や人生の節目、入居、生業に関連した様々な場面において厄運を追い払い、幸運をもたらすために儀礼を設けてきた。儀礼の方式は巫俗式であったり、儒教式・仏教式であったりする。ところが、キリスト教信者たちの場合もこれらの長い間の慣習を完全に切り離すことができず、キリスト教式に形式を変えて儀礼を行っている。例えると、誕生日の感謝礼拝、起工礼拝、上棟礼拝、入居礼拝、開業礼拝、豊漁礼拝、播種礼拝、追悼式などであるが、牧師は島民の依頼に応じていろんな形の儀礼を執行している。

第二に、上記に挙げたキリスト教式儀礼は伝統的方式を踏襲して行われている。とりわけ葬儀は伝統的方式をもっとも取り入れており、臨終礼拝、入棺式、葬礼式、下棺式といった葬儀の流れは伝統的方式にのっとっている。またキリスト教式葬儀を行う場合でも村の広場で村人をもてなすことは従来通り行っている。そして、新安郡は葬式の前夜に太鼓を叩きながら踊ったり、歌ったりする「バンダレ（밤달애）」という風習が現在でも残っている地域であるが、キリスト教式の場合でもバンダレを行うことがある。棺を部屋から運ぶときに、悪霊を追い払うために部屋の入り口に瓢を置き、それを割って出ていく「動棺祭（동관축）」も親族らが行えば黙認する。

祖先祭祀をキリスト教式に変えた追悼式の場合も、祭壇の供物を下げて身内の者で食べる「飲福（음복）」という伝統的慣習に因んで、追悼式を行っても食べ物たくさん用意して、翌日村人を呼んで一緒に食べることが多い。ただし、先祖に供物を供えたり、拝礼したりすることは偶像崇拜に当たり、やってはいけないこととされている。

キリスト教式儀礼が行われる際に、これらの方式の踏襲だけではなく、伝統的心情の引きずりも窺われる。キリスト教信者でも死者の祟りや、風水、遺骨の色を気にすることがある。特に供物への拘りは強く、供物を供えないことについて不安

を感じたり、子女としての責任を果たしていないと思ったりする。新安郡の場合は無学の年配の女性信者が多いが、彼女たちは牧師の説教以外は聖書のことを詳しく知る機会があまりない。そのため、牧師が禁じていることについてはきちんと守ろうとするが、牧師の力の及ばないところでは伝統的意識の中に留まっていることが多い。

第三に、キリスト教信者であっても村の共同体との関係は維持される。村には青年会、婦女会などの組織があるが、信者でも加入して行事などを一緒に行っている。また葬式を助け合う「喪徒契(상두계)」に入っている場合は、教会と喪徒契が役割分担をして一緒に協力する。ただ、やり方をめぐって摩擦が起こる場合がある。

第四に、教会では深刻になっている高齢化問題に対応して老人学校を開いている。聖潔教の教会では年寄りを対象に、韓国語や教養などを教える老人学校を始めた。押海島中央聖潔教会では2004年から老人学校を始めて、2015年9月現在は約300人が在籍しており、歌やゴルフ、韓国語、コンピューター、ヨガ、体操などを習っている。2008年には智島中央教会、2009年には八禽中央教会、荏子真理教会、慈恩新中央教会、長山中央教会、2013年には曾島甌島里教会、都草聖光教会、安佐中央教会、2015年には飛禽道谷教会でも始まった。このように多くの島で老人学校を開いており、これらの老人学校には信仰に拘らず、島民であるならば誰でも通うことができるので、非信者からもいい評判を得ている。

第五に、キリスト教が世俗化や合理化に乗っている側面がある。それまで葬儀は村人が協力して行うものであったが、現在は高齢化や共同体精神の衰退に伴い、内陸部の木浦にある葬儀場への依存度が高くなった。木浦でもっとも近い押海島の中央聖潔教会の牧師の話によると、2006年頃から人が亡くなると木浦にある葬儀場へ送ることが増えたという。現在は信者の場合でも3分の1ぐらいは木浦の葬儀場を利用している。木浦には納骨堂があるため、火葬してそのまま納骨堂に納める場合もある。

火葬は2003年と2004年、そして2006年の調査では見当たらなかったが、2009年以降の調査では

見られるようになった。火葬の増加は押海島だけではなく、他の新安郡の島でも起きている現象である。新安郡の中央部にある安佐島でも数年前から火葬をするようになり、西部教会では2015年9月現在5人が火葬をし、4体は家の墓に、1体は納骨堂に納めているという。火葬の場合は家の墓の一角に小さな穴を開け壺だけを納めるため、埋葬が簡単で楽だと考えられている。新安郡のキリスト教信者の間で葬儀場の利用や火葬が増加している原因は、子女が島に住んでいないため頼れる人がなく、村人との関係も以前ほど親密ではないからである。新安郡のキリスト教にも合理化や世俗化の波が押し寄せてきていることが窺われる。

おわりに

新安郡はキリスト教信者の殉教によってキリスト教が広がっており、現在韓国でもっともキリスト教が普及している地域である。現在でも殉教精神を見習うために牧師や伝道師たちが新安郡を訪れている。とりわけ曾島には2013年に文俊卿伝道師殉教記念館が開館し、キリスト教信者たちの訪問が続いており、夏になると若者向けのキャンプも開かれる。新安郡のキリスト教は殉教の血を無駄にしまいということから唯一神信仰に敏感に反応してきており、島嶼という孤立した環境条件もあって世俗文化に触れる機会が少なく、都会に比べると純粋な信仰を保っているといえる。迷信打破を掲げているキリスト教の普及に伴い、巫俗儀礼や家の守護神信仰、村祭り、生業に関わる祭りなどは多く姿を消すことになった。

ただ、高齢化が深刻な問題である新安郡では信者の多くが年配者である。彼らは長年伝統文化の中で過ごしてきたため、伝統文化が意識下にまで染み込んでいる。そのため、新安郡の教会は伝統文化に柔軟に対応しており、伝統的儀礼をキリスト教式に変えた新たな儀礼が多く作り出されている。キリスト教式儀礼は伝統儀礼の方式を踏襲した形式が多いが、方式だけではなく、執り行っている信者の意識や観念の引きずりも窺われる。

今やキリスト教を抜きにして新安郡の文化を論じることはできないほど、新安郡にはキリスト教

が浸透している。近代化の波に乗ってキリスト教は在来文化に様々な働きかけをしてきたが、今後は高齢化や過疎化, 世俗化の問題を抱えている新安郡の社会にどう対応し, 生活の活性化を確立していけるかが課題であるといえよう。

注

- 1) 이만열 『한국 기독교 수용사 연구』, 두레시대, 1998, 333頁。
- 2) 吳鍾豊 『全羅南道の 基督教에 關한 文化地理的研究』, 高麗大學校教育大學院, 1987, 9頁。
- 3) 日本の主権侵害と武力支配によって形成された民族的矛盾を克服するために, 全民族が独立の力を發揮して起こした抗日独立闘争。
- 4) 吳鍾豊, 前掲書, 63頁。
- 5) 1910 Station Reports of the Southern Presbyterian Mission in Korea, pp.45-46.
- 6) 안영로 『전라도가 고향이지요—미국남장로교 선교사들의 눈물과 땀의 발자취』, 콤포출판사, 1998, 152頁。
- 7) 教会役職の名称。
- 8) 신안군지 편찬위원회 『新安郡誌』, 전라남도 신안군, 2000, 489-490頁。
- 9) 임병진·유승준 『천국의 섬』, 가나복스, 2007, 229頁。
- 10) 신안군지 편찬위원회, 前掲書, 485-486頁。
- 11) 韓国では巫女を「巫堂(무당)」と呼ぶが, 新安郡では「ダンゴル(당골)」と呼んでいる。ここで「ダンゴル(당골)」とは韓国語の「ダンゴル(단골)」から来た言葉であり, この言葉の意味は常連である。以前韓国では村ごとに巫女が住んで村の人々の生活に深く関わっていたので, このような名前がつけられている。
- 12) 「ソンヂュ(성주; 成主)」は屋敷内のすべてを支配するもっとも格の上の守護神。
- 13) 韓国における「鬼神(귀신)」は死者の霊, または人に福と禍をもたらす霊という意味を持っている。
- 14) 「トケビ(도깨비)」は本来財宝に関わる神格であったとされるが, それが時代がくだるにつれてトケビの概念も変化を重ね, 意地悪でいたずら好きな妖怪的属性の強い存在として観念されるようになった。
- 15) 龍は海を司る神聖な動物として観念されており, 龍を神格化したのが龍王神(용왕신)である。
- 16) 신안군지 편찬위원회, 前掲書, 457頁。
- 17) 이경엽 「기독교의 전파와 의례생활의 변화—신안군 중도를 중심으로」, 『島嶼文化』 제28집, 목포대학교도서문화연구소, 2006, 198-200頁。
- 18) 윤형숙 「기독교의 전파와 압해도 사회문화의 변화」, 『島嶼文化』 제18집, 木浦大學校 島嶼文化研究所, 2000, 220-221頁。

19) 森岡清美 『『外来宗教の土着化』をめぐる概念的整理』, 『史潮』66号, 大塚史学会, 1972, 53頁。

20) 森岡清美, 前掲論文, 53-54頁。

参考文献

- 김수진 『예수께서 오신 아름다운 섬—비금 기독교 100년사』 도서출판 진흥, 2008.
- 송현숙 「호남지방 기독교 선교기지 형성과 확장에 관한 연구」, 『한국 기독교와 역사』 제一九호, 한국 기독교 역사 연구소, 2003.
- 안대희 「一八九三—一九四五년全州西門外教會의 成長過程과 民族運動」, 『지방사와지방문화』 五권一호, 역사문화학회, 2002.
- 朱明俊 「미국 남장로교 선교부의 전라도 선교」, 『論文集』 21, 全州大學校, 1992.
- 차중순 「미국 남장로교회의 호남지방 선교활동」, 『기독교사상연구』 5, 고신대학교 기독교사상연구소, 1998.
- 호남교회사연구소 『湖南教會史研究』, 신흥기획, 1998.